

吉田城址 発掘調査現地説明会資料

令和7年11月1日(土) 主催：豊橋市文化財センター

時間 10:00～12:00、13:30～15:30

吉田城址とは？

戦国時代に築かれた今橋城は、今川義元による支配の頃に「吉田城」と改められ、戦国時代後期に酒井忠次、戦国時代末期に池田照政(後の輝政)が城主となり、東三河地方の政治の中心を担いました。江戸時代前期には松平忠利により名古屋城の残石を用いて本丸御殿や石垣が築かれました。その後、宝永地震(1707)・安政地震(1854)などの地震により石垣は崩落し、その度に積み直されました。平成29年には日本城郭協会によって『続日本100名城』に選定。令和3年度末に吉田城址は遺構を後世へ守り伝えるために“豊橋市指定史跡”になりました。さらに、令和4年度末には吉田城址の活用整備の基本方針である『吉田城址保存活用計画』を策定しました。

吉田城址は、廃城から約150年を経ており、石垣や土塁などの損傷が各所で確認できます。令和元～3年度には石垣が立て続けに崩落し、吉田城の遺構の劣化が深刻な状況にあることが広く知られました。

これらの崩落箇所に共通するのは、近年まで石垣の直上に大木が成育していたことです。全国的にも樹木を原因とする石垣の崩落事例は数多く、更には近年頻発する大雨によって、被害が広がる可能性があります。今後は、公園利用者の安全確保と吉田城址の遺構保護のため、経過観察とあわせ必要に応じた樹木の伐採、また伐採後の切株の管理や雨水対策を講じ、予期し得る危険を軽減していくことが重要です。

今回の修理石垣とは？

今年度は、崩落する危険のあった本丸北東隅石垣、裏門南側石垣の二か所の石垣の解体修理に伴い、発掘調査を実施しました。

①本丸北東隅石垣(A地区)

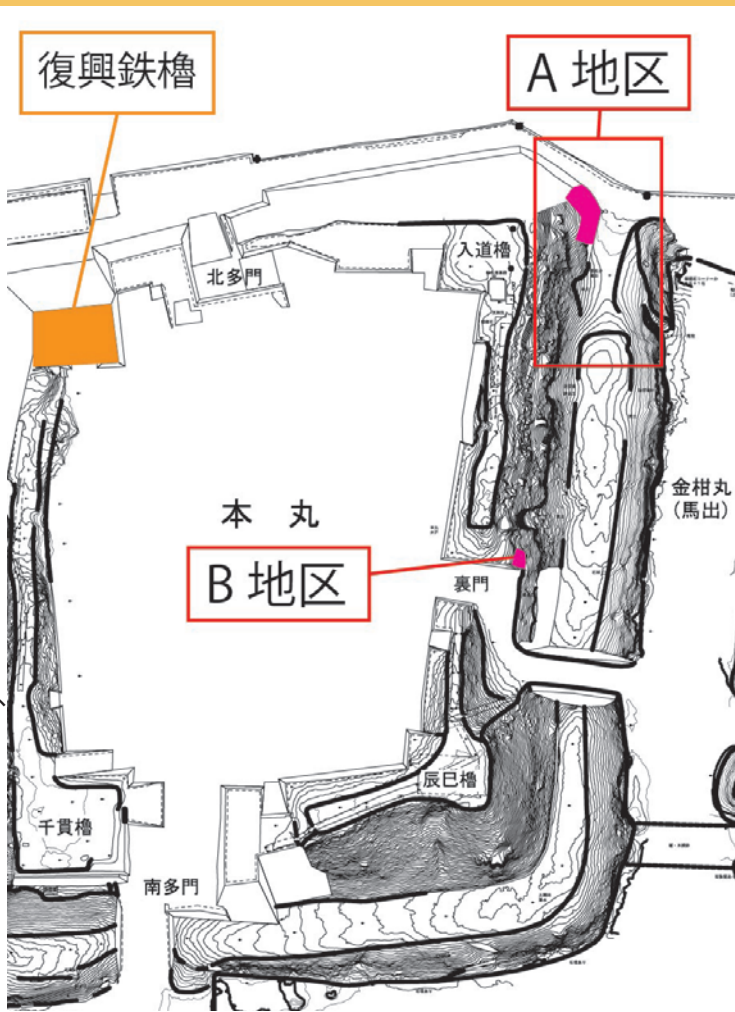
通称「鬼門除け」と呼ばれる石垣です。高さ約10mの土塁下部に位置する、高さ約3mの腰巻石垣です。平面は土塁の角に沿うようにカーブを描きます。石材は主に三河湾産の花崗閃緑岩を用い、刻印や矢穴が見られます。

ここが大きく孕んだため、解体修理が行われました。2回の解体にあわせ、天端・中段・根石付近の3回にわけ発掘調査を行っています。

②裏門北側石垣東面・北面(B地区)

裏門北側石垣は南面の中央が昭和46年(1971)に崩落し、積み直しを受けています。その際の写真では東面の崩落はなかったと見られます。東面は幅3m、高さ約1.2m、北面は幅1mが残存していました。

東面が大きく前傾したため、解体修理が行われました。1回の解体に合わせ、天端・解体後の2回にわけ発掘調査を行っています。



ポイント1 積み直しの経歴が明らかに！(A地区)

吉田城は宝永4年(1707)の宝永地震、嘉永7年(1854)の安政東海地震の被災記録が残ります。これらを含め、江戸時代前期から現在に至るまでの石垣の状況を確認できます(①～④)。これによると、平面がカーブを描く構造は、江戸前期にはすでに存在した事がわかります(①)。本調査区は宝永・安政地震の積み直し箇所となりますが、両積み直し部分を挟むように様相が異なる箇所があります(⑤)。また、裏込め石中にこの範囲と対応するように大型の裏込め石が見られました(⑥)。この根石下からコンクリート・レンガが出土したため、この範囲は昭和の積み直しと考えられます(ポイント3参照)。

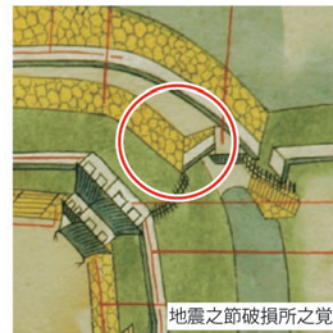
石垣内部の土塁には、裏込め石が部分的に見られます(⑦)。一部の裏込め石は土層(ライン)で結ぶばれ、この上下で土層の様相が異なります。そのため、ラインの上下で時期差がある可能性があります。ラインを構成する裏込め石は宝永・安政期の石垣に伴わず、瓦を含むためラインの下は江戸前期～宝永地震の石垣の痕跡(⑦赤部分)、ラインの上は宝永地震の積み直しの可能性があります(⑦青部分)。また、石垣の下は黒色土層より池田照政期の軒丸瓦と近世丸瓦が出土しました(⑦緑部分)。そのため、黒色土は石垣構築以前(戦国末期～江戸前期)の堀の埋土の可能性があります。これにより、現在の本丸東側の内堀が掘られた際(池田照政期)にはこの場所に石垣はなく、江戸前期に土塁のハバキ(補強)として本石垣が築かれた可能性があります。



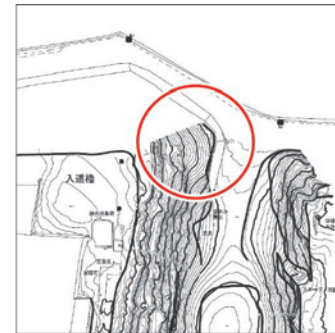
①江戸時代前期



②江戸時代中期
宝永4年(1707)



③江戸時代後期
嘉永7年(安政元年)(1854)



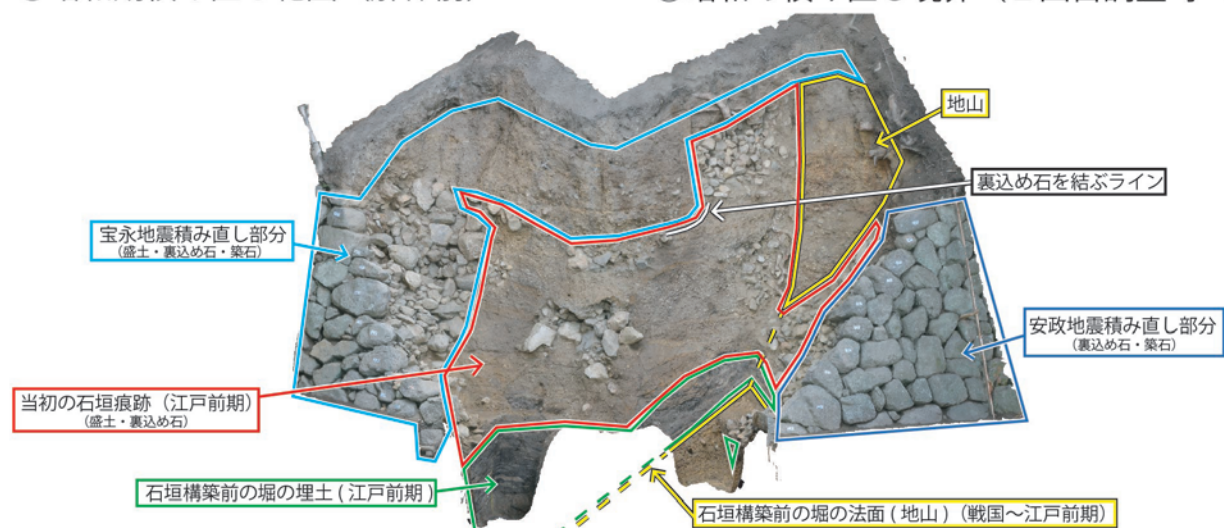
④現在



⑤昭和期積み直し範囲(解体前)



⑥昭和の積み直し境界(2回目調査時(9月))

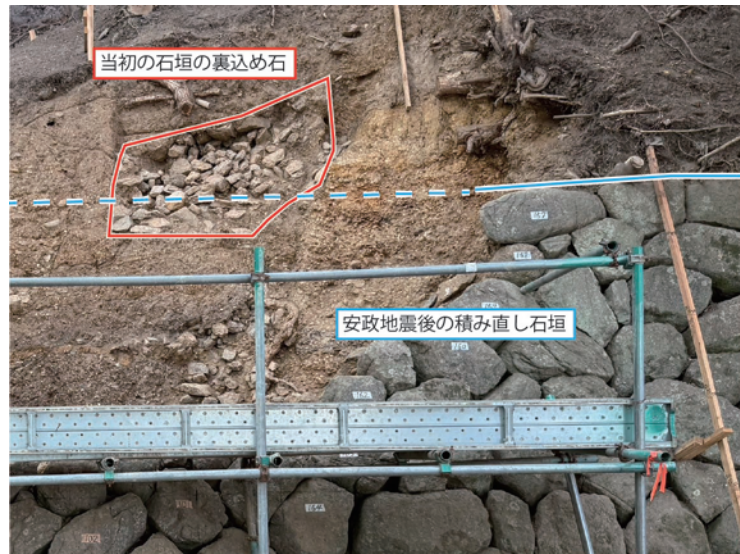


⑦ A地区の概要(現地説明会時点)

ポイント2 かつての石垣規模が明らかに！（A 地区）

ポイント1で紹介した当初の石垣の裏込め石の天端は標高約 9.5m、対して現在の宝永・安政期石垣の天端は標高約 8.4m と、1mの差があります（①）。このことから、江戸時代前期（当初）の石垣は今の3mより高い高さ約4mであった可能性があります。

解体した石垣の南側は、土の法面（土羽^{どは}）となっています。この土羽に、裏込め石が露出していました（②）。裏込め石の材質・標高から、これは当初の石垣の裏込め石である可能性があります。江戸時代前期の絵図には、石垣は金柑丸から内堀へ下りる階段付近まで伸びています（ポイント1①）。同様な表現は、宝永地震の被災記録にも見られます（ポイント1②）。しかし、安政地震の被災記録には、階段より北側の門付近で石垣が途切れます（ポイント1③）。そのため、宝永地震～安政地震の間に、石垣の規模は縮小された可能性があります。



①安政地震積み直し石垣と当初の石垣の裏込め石



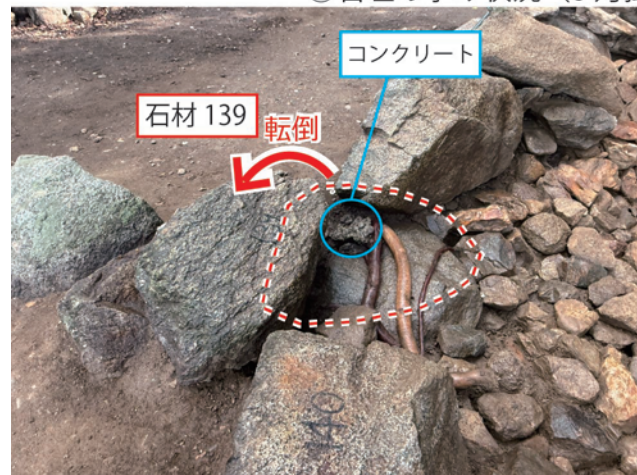
②解体石垣南側の土羽に露出した裏込め石

ポイント3 孕みの原因が判明（A 地区）

解体石垣の中央下部に、石垣から飛び出す石材 139 があります。これはコンクリートの存在から昭和に積み直した石材と考えられます。これが 2007 年～2016 年に石垣の外側へ倒れたことで空間が生まれ、上方の石材がその空間へ向かい下にズレたことで、孕んだことがわかりました。石材 139 の背後に根があり、これが下方から突き上げたことで石材 139 が倒れたと考えられます。北面を形成する根石も、同じ根により前方へ押し出されていました。



①石垣の孕み状況（6 月撮影）



②孕みの原因となった石材と根

ポイント4 刻印を確認！（A 地区）

解体対象の 167 石のうち、刻印が見られる石材が 5 石ありました。いずれも花崗閃緑岩で、そのうち 3 点（2～4）は今回初めて確認しました。花崗閃緑岩は名古屋城の残石^{ざんせき}であると考えられ、元和 8 年（1622）頃の松平忠利の本丸整備の際に搬入^{はんいり}されたと考えられます。



※名古屋城の複数の丁場で確認



※名古屋城の加藤嘉明が使用



※名古屋城の田中吉政丁場で類似



※名古屋城の福島正則丁場で類似



※名古屋城の福島正則丁場で類似

ポイント5 石垣内部の構造が明らかに！（B 地区）

裏門は北側石垣と南側石垣で構成されています。南側石垣は令和 3 年度に崩落に伴う解体修理・発掘調査を実施し、内部より石垣が積まれる以前の土塁が確認されています（豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第 163 集）。

北側石垣南面は中央付近が昭和 46 年に崩落しました（①）。その際の写真と南面東側は現状と変わらず、東面・北面は崩落しなかったと考えられます（②・③）。しかし、発掘調査前から裏込め石が天端に露出し、整形された天端面が見られなかったことから、本来の石垣は現状より高いものであった可能性があります。裏門は安政地震では倒壊していないことから、安政地震から昭和 46 年の間に現在の姿になった可能性があります。また、南面に伴う可能性がある中型石材（土留か）を確認しました（④）。宝永地震では裏門が倒壊しているため、この際のものである可能性があります。

裏込め石と土塁の境界は①層・②層は鋸歯状となり、裏込め石と土塁と一緒に構築されたことを示します（⑤）。しかし、③層は裏込め石により、一部削られている様相を呈します。そのため、元々は③層は石垣を伴わない土塁であり、石垣を築くにあたり土塁を削った後に、築石・裏込め石を積みながら①・②層を構築し、石垣が積まれた可能性があります。令和 3 年度の南側石垣発掘調査で確認された、石垣構築以前の土塁の天端と③層の天端の標高が合うことから、南側石垣のものとセットになる可能性があります。

東面が前傾した原因は、根石付近の樹木の根が石垣の下から内部へ伸びたことで突き上げられたためと考えられます。



①裏門北側石垣南面の崩落風景（昭和 46 年）



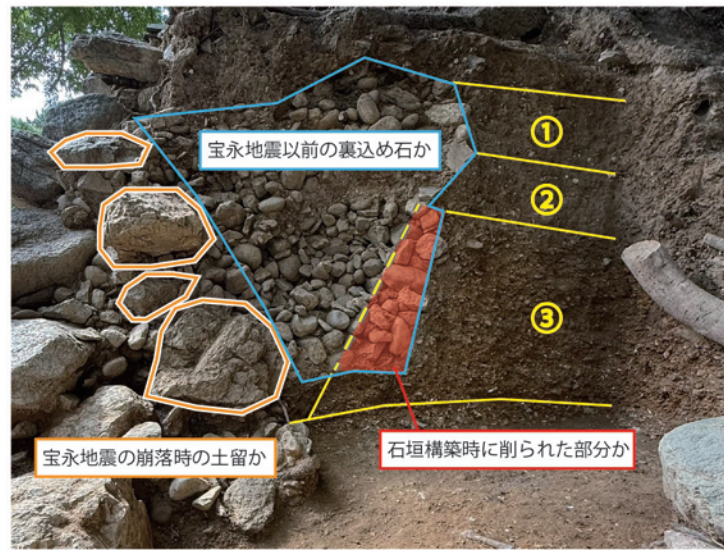
②裏門北側石垣の東面（解体前）



③裏門北側石垣の北面（解体前）



④裏門北側石垣の東面（解体後）



⑤石垣内部の土層